

飯泉先生・山内先生の残したもの

小室裕明*

島根大学の地球資源環境学教室が地質に強い卒業生を輩出してきたことで定評があるのは、飯泉・山内両先生のお力によるところがひじょうに大きいと思います。

当教室が文理学部地学科から理学部地質学科に改組したころは、日本中の地質学教室が地球物理学に侵食されはじめていた時代でした。多くの地質学教室が、地球物理や地球化学に講座を譲って地球科学教室へと改組していた中で、島根大学は頑固に地質の砦を守っていました。その中心は、当時の教授であった大久保先生や小林先生だったわけですが、そのとき助教授を務めておられ、学生たちと一緒に何日も山を歩く飯泉・山内両先生がいらしたからこそ、砦が守れたのだと思います。

ついに地球物理を取り込まなかったために、その後の理工融合による改組でも、「地質学を基礎と」するスジが一本通せたのではないのでしょうか。そして、最近の技術者教育プログラム認定では、全国の地球科学系教室の中で秋田大学とならんで当教室が先鞭をつけております。これも、飯泉・山内両先生を中心として「地質学」の砦を守ってきたことが一つの理由であると信じます。

私がこの教室に赴任してきたころは、飯泉先生もまだお若くて、女子学生には一番人気がありました。やや寡黙でソフトムードだったからでしょうか。しかし、じつは結構本質を突いた辛辣なことを口にされる方で、それはつまり批判精神が旺盛であるということにはかなりません。このことは、飯泉先生が評議員などの要職に就かれてから、まさに本領が発揮され、大学や学部の運営が間違った方向へ進もうとするときには必ず警告的発言をなさるのでした。したがって、われわれ後輩にとっては、飯泉先生の見識は、つねに本質を見失わないための「導きの糸」だったわけです。

また、辛辣なことを口にされるにもかかわらず、不思議なことに敵を作らない方で、学部の中でもひとときわ人望がありました。

山陰の花崗岩類は、今日ではかなり詳細な地質図ができていますが、これは飯泉先生のご貢献によるところがたいへん大きいと思います。フィールドワークによって花崗岩類を丹念に岩相区分し、貫入関係を明らかにしたのちに、放射年代測定を行なって時代を解明してきました。また、「肉眼で鉱物が見える岩石（深成岩）しか相手にしない」とおっしゃりながら、一方では火山岩も研究され、メソボル団研（Mesozoicのvolcanic rocksつまり中生代火山岩類の団体研究）の中心メンバーとして、「メソ」に一括されていた火山岩類に古第三紀の火山岩類が多く含まれていることを明らかにしました。その結果、今では「メソボル」はほとんど死語となっています。

山内先生は、下町的なストレートな口の利き方と大きな声で、一見ぶっきらぼうにみえます。山内先生のことをよく知らない学生は、その外面だけで敬遠する向きもあったようです。しかし、実際には、何人もの留年生が山内先生のおかげで卒業でき、しかも現在は調査業界でしっかりした仕事をしている人が少なくない。これはほんとうに驚くべきことです。つまり、どんなに不真面目でデキが悪くても、けっして学生を見捨てないのですね。

もっとも、他人に対して寛大であったと同様に、ご自身に対しても寛大だったようで、ときとしてやや無原則な言動が波紋を引き起こすこともありました。学部の中で他学科とやりあうときには、文理時代からの

*島根大学総合理工学部教授

約束事に生き字引のごとく精通しておられたので、まず負けることはありませんでしたが、教室の中ではあっけなく弱みを見せてしまうこともなかったとはいえません。

私は、山内先生の大学の後輩だったので、私が修士課程1年ごろに山内先生が母校に提出された博士論文のプレゼンテーションを拝聴したことがあります。山内先生の博士論文は、秩父盆地新第三系中にみられるスランプ層の研究で、堆積同時構造の発展方向を示唆するひじょうにユニークで面白い内容ですが、その後山内先生は、そういった堆積構造を深く突っ込んで研究する方向には進みませんでした。むしろ、山陰の新第三系にかかわることなら何でもやる、という具合に間口を広げていったのです。結果的にみて、この山陰の地にはそういう方が必要だったといえるでしょう。なにしろ25年前にはデータがほとんどない広大な地質情報空白地域でしたから、まず記載を積み重ねる仕事が重要だったわけです。

山陰の新第三系で、山内先生の足跡がついていない地域はないのではないのでしょうか。そして、こういう地方大学では、その地域のことはすべて知っているという研究者が必要とされているのです。それは、社会から要請されることのひとつであり、まさに大学の社会的貢献を身をもって実現されていたのだと思います。

両先生のご退官により、文理学部時代からの教室を知る先生がいなくなります。しかし、歴史を消すことはできないのであり、歴史こそが現役世代にとっての価値であります。両先生が守ってこられた「地質に強い」という当教室の特色は、これからもわれわれ後輩が発展させていかねばならないことです。

飯泉・山内両先生、長い間ごくろうさまでした。